軍隊と地域の結節点としての下宿
――軍人と地域住民との相互行為過程を通した関係形成に着目して――

清水　亮

本研究は、戦前戦中に海軍航空隊が立地していた地域の軍人向け下宿という場の分析を通して、軍隊が社会に与える影響に関する考察を行う。社会変動論の図式に依拠する先行研究に対して本研究は、軍人と地域住民の相互行為がなされる特定の場が、変動の動因となる要素としていかなる作用を果たしているかを解明する。自宅の一部を間貸しする農民と、定期的・反復的に訪問する軍人との間で生起する対面的な相互行為の過程を通して、両者の間にいかなる関係性が形成されていったかについて、聞き書き資料を用いて分析を行った。

本論の分析対象となった下宿は、軍人と地域住民との間に単なる契約関係にとどまらない交際関係を創出し、さらに農家の娘と軍人との結婚を通した縁戚関係を形成する作用をもった場であったことが明らかになった。この観点から下宿は、軍隊と地域を結びつける結節点として捉えることができる。

1　はじめに

1－1　問題関心

軍隊という存在は、学校や工場等と同じく近代社会を作り上げてきた一つの重要な要素である。軍事領域が社会的世界に及ぼしてきた幅広い衝撃（Giddens 1985=1999: 33）は、社会学の対象としての近現代社会の理解に欠かせない。しかし、軍隊に関しては家族などの他の制度に比べて伝統的に社会学で議論されてこなかった（Giddens 1985=1999: 33）。それはとりわけ、軍事社会学が発展した欧米に対して軍事や戦争を「客観的」に語ることへのタブーがあった（野上 2012: 11-2）日本の社会学に当てはまるだろう。この状況のなかでは、軍隊について一定の蓄積をもつ歴史学[1]などの隣接諸科学の成果を吸収しつつ、社会学的な視座から分析を行うことが重要な課題である。

以上の問題関心を踏まえて、本論の目的は、戦前戦中に軍隊が立地した地域を対象とする事例研究を通して、軍隊の社会に対する影響の一端を解明することにある。詳細は第 2 章で論じるが、本研究のアプローチの特徴は、軍隊の社会に対する影響力を軍隊から発する一方向的な規定力として描くのではなく、軍隊がもたらしたものに対して影響を被る側の人々の対応にも着目しながら考察することにある。

1－2　研究対象 ―― 軍人向け下宿という場

以上を踏まえて本論は、茨城県旧阿見村という戦前に海軍航空隊が立地していた農村地域において、住民（農民）が経営していた軍人向けの下宿を研究対象とする。旧阿見村は霞ヶ浦西南岸に位置し、県南の中心商業都市土浦の近郊に位置する農村地帯であった。1920 年に霞ヶ

浦海軍飛行場が開場し、操縦員教育を担当する霞ヶ浦海軍航空隊が 1922 年に設置されて以来軍隊と密接に関わりながら発展し、さらに 1939 年以降、航空廠という工場や土浦海軍航空隊という少年航空兵養成機関などが集積して敗戦を迎えた地域である。

海軍航空隊の構成員は、陸軍のように周辺地域出身の徴兵された兵士ではなく、志願兵が多くを占めている。彼らは基本的には基地の内部で起居しながら訓練を行うが、休息のための外出日も設けられていた。その際には階級に応じて[2]週に数回の外泊が許されており、そこに下宿の需要が発生した。基本的に下宿は軍人と戸主との個人契約の形態をとっており、軍人の間での口コミによる紹介や下宿経営者側の張り紙による募集（小林 1994: 33）を通じて運営される事業であった。すなわち下宿は軍から課せられた義務ではなかった。

下宿の基本的な形態は、農家の住宅の座敷や離れの間貸しである。間貸しは家が一定程度大きくなければ不可能であり、小作など家が小さい場合は、昼に兵隊を家に上げて昼食を食べさせるだけ形態になった（小林 1994: 33）。逆に土地と資本を持つ裕福な農家は、個人で軍人向けの別棟貸家を建てた例もある（小林 1994: 33）。以上を踏まえて本論においては、宿泊を伴うか否かにかかわらず自宅の一部を間貸しするもの全てを下宿の範囲に含める。

本論の問題関心に即すると、下宿は以下の 2 つの観点から社会学的な考察対象となる。

第一に、軍人が定期的に通う下宿は、普段は基地の内外に隔てられている軍人と地域住民が密に対面的に接触するインターフェースの一つであったことである。例えば旧阿見村の開業医の妻は戦後に下宿の様子を以下のように書き残している。

> 阿見村も海軍ならでは、というほどの軍隊の中に囲まれた環境にあって発展してきたのである。農商にかかわらず、大ていの家では軍人を歓待し、部屋を貸したり、下宿になったりして、限られた軍隊の休日を、のんびり過す憩いの場となれるよう、心尽くしたのであった。あの頃の海軍さんの下宿に上る時の、元気なうれしそうな顔、日曜ともなれば村中に又、バスのなかに賑わったものである。（丸山 1979: 8）

この回想にはややノスタルジーが入り込んでいるようにみえるが、重要なのは、地域の相当数の家が下宿業を行い、また軍人への応接を行っていたことである。これは、軍人が地域の下宿に出入りすることを通して、軍隊が地域の人々の日常生活と地続きに存在していたことを意味する。以上から、下宿は軍人と地域住民の相互行為が展開される場として社会学的研究の対象となることがわかる。

第二に、下宿で展開される相互行為は、基本的に一回限りの民宿や民泊とも異なり、数ヶ月から数年の在隊期間にわたり週に数回軍人が下宿を訪れるという反復的・恒常的な往来にもとづく。つまり下宿は、ある程度の時間の幅をもって相互行為が展開される社会過程として社会学的研究の対象となる。ここから、軍隊の立地という一時点の出来事のインパクト（例えば土地買収やインフラ整備）ではなく、軍隊が継続的に地域の生活と交錯することを通して社会に与える影響を考察することができる。

1－3　問い、および本論の構成

以上を踏まえて、本論の問いは、下宿という場における相互行為の過程を通して、軍人と地

域住民との間にどのような関係性が形成されたか、と設定される。これを通して、軍隊が社会に与えた影響の一つとして、下宿という場がいかなる作用をもっていたかを明らかにする。

本論の構成は以下の通りである。第 2 章において先行研究の検討を行い、既存の社会変動論的な視座に対して、シンボリック相互作用論的な視座の導入と生活史のアプローチとして本研究を位置づける。第 3 章で既存の先行調査のデータセットの二次分析を主とする本研究の方法について詳細に論じる。第 4 章がデータの分析である。まず 4 － 1 ならびに 4 ― 2 において、軍人と下宿経営者の双方の視点から下宿という場がいかに成り立っているかを説明する。そして 4 － 3 、 4 － 4 において、下宿という場において積み重ねられる相互行為過程を通して軍人と地域住民がどのような関係性を形成していったかを明らかにする。第 5 章において、以上の分析結果について確認し、研究の意義と限界、今後の課題を述べる。

2　先行研究の検討を通した分析の視座の設定

戦前・戦中の軍隊と地域の関係性に関して精力的に研究を行ってきたのは日本近代史である。特に、1990 年代頃から各地の自治体史の編纂において従来は薄かった軍隊との関係性に紙幅が割かれるようになってきたという背景のもとに（松下 2013: 2)、『軍隊と地域』（荒川 2001）等を嚆矢として、「軍隊と地域」研究と呼ばれる研究群が 2000 年代以降急速に蓄積されてきた。この研究群は、軍隊と地域を、単純な対立関係、一方的な支配関係にはおかず、地域の主体性や能動性にも着目して両者の相互関係を考察してきた（中野 2004: 41)。

この歴史学の研究群には、本研究が対象とする下宿について本格的に考察した先行研究は管見の限り存在しないものの、豊富な社会史のデータを伴い、社会に対する軍隊の影響のあり方について、いくつもの論点を提示している。蓄積の乏しい社会学にとっての課題は、この研究群を踏まえて、どのような社会学的な研究を立ち上げるかである。

一方で社会学において、戦前戦中の軍隊が社会に与えた影響に関して荻野昌弘は、「軍隊設置という大規模公共事業」が地域の産業構造や社会構造の変動（荻野 2012: 17）をもたらすことに着目し、「戦争が生みだす社会」というコンセプトの下に軍隊が社会の変動に対してもたらす効果について議論を展開している（荻野 2013)。この荻野の問題関心を共有した実証的な事例研究として、旧軍用地の造成・転用に着目して空間構造の変動を解明しようとする試みもある（今井・前田 2010)。これらは巨視的な社会変動論としての一つの社会学的研究の可能性を示したものといえる。

しかし、この研究展開においては、軍隊の設置は特定の帰結をもたらす一方向的な規定力として描かれ、相互関係に着目する「軍隊と地域」研究が論じてきた軍隊に対する社会の側の対応が捨象されてしまう。このような図式が社会変動に関する理論としても問題があることは、シンボリック相互作用論の立場からのハーバート・ブルーマーの産業化論批判（Blumer 1990=1995）から浮き彫りになる。ブルーマーは産業化が特定の帰結をもたらすという見解に反駁し、特定の帰結にいたるまでの産業化過程と集団生活との相互作用の一定の時間を要する過程 (Blumer 1990=1995: 206)―― 例えば工場における経営者と労働者の間で生じる行動と相手の行動に対する解釈とそれに基づいた自らの

行動の再組織化の連鎖（Blumer 1990=1995: 208）――の探求の必要性を訴えた。

集団生活と産業化の接触点には、提供されたものに対応しなければならないひとびとがいる。ひとびとはそれに対応するために、種々の規範や、態度、願望、そして既存の行動様式をもちだしてくる。ひとびとはまた、彼らが直面しているものを評価し、行動の方向を考えださなければならない。（Blumer 1990=1995: 195）

１－２で述べたように本研究がとりあげる下宿とは、来訪する軍人と、応対する地域住民の相互行為の過程が展開される場である。これはブルーマーの視座に依拠すれば、軍人の来訪という軍隊がもたらしたものと地域の人々の生活との接触点であるといえる。この接触点の分析を通して、軍隊が社会に対する影響を、軍隊からの一方的な規定力のみではなく、軍隊がもたらしたものを受け止める地域住民の対応を視野に入れて論じることができる。

このような相互行為に着目した視座に基づく研究に対して有効なアプローチとして、過去の時代を生きた人々に対して聞き書きを行う生活史（ライフヒストリー）がある。佐藤健二が論じるように、生活史研究において把握が目指される「生活」という概念は、なによりも対面的な人間関係が展開される場を指している。

生活という概念は、社会という概念の抽象性に対抗する具体性をめざして採用されている。社会ということばは、イメージの範囲をしぼりがたく、すぐに国民国家大にまで上向しかねない抽象的な一般性を帯びている。それに対して、個人の身の周りの具体的な関係＝構造こそが対象であるとしめすために、もちだされたのが生活である。

すなわち、ここでいう生活とはまず日常生活のことであり、中心に置かれた個人の身の回りの時間と空間の具体的な形態のことを意味する。…… そうした生活においては、登場する人間も、より具体的な状況規定をこうむらざるをえない。基本となる家族を核にして、それぞれの顔をもち役割をもつ人々が日常的な生活の舞台に登場し、さまざまな経緯や必然に彩られて、個人をとりまく関係性を構成しているからである（佐藤 1995: 20-1）

巨視的な社会変動論が、ここで述べられている「社会」を出発点としてマクロな構造の変動を取り扱う研究であるとすれば、対して本論は、「生活」の場における対面的な関係性を出発点として、その場から何が生み出されていくかを問うものである。すなわち、軍隊を介したＡという構造からＢという構造への地域社会全体の変動を語る図式ではなく、下宿という場において軍人と地域住民が交渉する過程を通して、どのような関係性が生み出されたのかを論じるものである。以上述べてきたアプローチは、社会の変動の全体像の描写にはつながらないという欠点と引き換えに、変動の動因となる個別要素の作用のあり方について明らかにできるという認識利得をもつといえる。

３　研究方法

研究方法としては、同時代の一次資料の乏しさと下宿について明確な記憶をもつ体験者の乏しさから、既存の聞き書き資料の二次分析という方法をとる。

主要なデータとして、筑波大学大学院で民俗学を学んでいた大学院生小林将人が 1993 年 2 月から約一年間を費やして阿見の青宿集落の 20 戸の人々に対して聞き書きを行った記録を用いる[3]。修士論文「むらと海軍」（以下、「小林論文」と略記）の末尾に、「資料編　家々の航空隊との関わり」として掲載されている聞き書きのデータ（小林 1994: 127-61）を主に利用した。20 家族分で、それぞれの聞き書き記録は、①家の歴史・話者について、②航空隊との関わり、③新町、④なりわいの変化、⑤空襲・戦時、⑥戦後という項目に整理されている。聞き書きにおいてフィールドノーツに書いた内容をワープロに全て打ち込み、①等の項目ごとにカードに整理したものが資料編である[4]。

このデータを用いて、他の研究者によって収集・作成された既存の質的データセットを利用して、オリジナルの研究とは異なる視座から分析を行う質的調査データの二次分析（Secondary Analysis of Qualitative Data）（武田 2009）を実行する。この方法の利点は、オリジナル調査データと同等のデータセットを自ら作成することが困難な場合でも、既存の優れたデータセットを活用して研究を遂行できる点にある[5]（武田 2009: 204）。実際、小林論文で調査対象となった戦前の下宿を経験していた人々はほとんど逝去してしまっているため[6]、本研究の調査において、後述するように本論の考察対象となる 1939 年以前の下宿について適切な聞き書き対象者を見つけることができなかった。また、農村部であることもあって旧阿見村の下宿に関する同時代の資料は発見できていない。この状況下で小林論文は二十余年前の調査だからこそ得られた貴重な資料である。

この方法を採用する際には、利用する既存のデータに関する資料批判を、オリジナルの調査が行われたコンテキストの理解も含めて行う必要がある（森久 2013: 84）。ここでは小林論文における研究の企図、方法、データの長所と短所について確認したい。まず小林論文の企図は、外部社会の影響（「近代化」）を介した農村の変化を動態的に分析する問題関心（小林 1994: 2）から、航空隊設置の影響を介した人々の生活（特になりわい）の変化を解明し、それとの関連から村の民俗の変化を論じることにあった（小林 1994: 7-8）。それゆえに調査も、「海軍航空隊との関わりという点から話者の話を何でも聞いていこうという姿勢」（小林 1994: 7）で進められ、そのなかで「青宿の人々が海軍航空隊との関わりということで語ってくれたことのまず第一に、海軍の兵隊を下宿させた」（小林 1994: 32）というトピックが出てきたという経緯で、下宿に関するデータが蓄積されていった。調査の焦点は、「それぞれの家の航空隊との関わりと共に、それがなりわいの変化とどのように関連しているか」（小林 1994: 7）という観点に絞られていき、先述した①～⑥の項目ごとに整理されたものが資料編に掲載された。

以上を踏まえてデータの長所として、現在では収集不可能なデータであることに加え、軍隊を介した生活の変動を明らかにしようとする点で本研究と問題関心の方向性を共有していることが挙げられる。短所としては、小林氏にとっての主要な説明対象は、祭りなどの民俗の変化にあり、下宿自体について研究するための調査ではなかったため、それぞれの話者の下宿に関する語りの質・量（あるいは語ったことのどれくらいがノーツに記録されたか）にはかなりのばらつきがあることが挙げられる。語り手によっては下宿についてほとんど語っていない場合もあり、下宿の形態や運営状況などについても統一的な質問項目に基づく情報収集がなされ

ているわけではない。

データの使用基準については、オリジナル資料としての小林論文の資料編（小林 1994: 127-61）の 20 ケース（20 戸）のデータから本論の関心に基づいた二次分析の対象となるデータを以下のように設定する。まず本論は農家が経営する下宿を研究対象とするため非農家の 5 ケース[7]を除いた 15 ケースに絞り、さらに本論が対象とする下宿に関する言及が全くない農家 2 ケースを除いた 13 ケース（表 1 参照）を分析対象とした。以下の表 1 に、調査対象者の年齢・生年・嫁入り年など語りの時期の特定につながる情報、農業規模の目安として所有する田圃の面積、そして家が経営していた下宿に関する情

表 1　二次分析の対象となる聞き書き対象者の基本情報一覧

記号	性別・生年（女性の場合：嫁入り年）	所有田圃面積	家が経営していた下宿に関する情報
ア	男性 1912 年 女性 1911 年（1933 年嫁入）	2-3 町	座敷二間に下士官 4 人が交代で宿泊。他に日帰りの兵が 15 人位いた。士官向けの別棟貸家もあり。
イ	女性 1910 年（1933 年嫁入）	7-8 反	一番奥の座敷二間を 4，5 人に交代で宿泊用に貸す。他に日帰りも受け入れていた。
ウ	男性 1925 年	3 町	奥の座敷二間（8 畳と 10 畳）に 10 人位一度に来た。下士官用の別棟貸家もあり。
エ	男性 1926 年	1.6 町	2,3 人の宿泊と、10 畳の座敷で日帰り 10 数名。
オ	男性 1929 年	5-6 町	10～20 人（宿泊か日帰り不明）。
カ	男性 1923 年	1 町	宿泊と日帰り合わせて 20～30 人。
キ	女性 1914 年（1934 年嫁入）	1 町	下宿は行っていない。
ク	男性 1929 年 女性 1930 年	8 反	３人位が毎週末に宿泊。
ケ	男性 1915 年	5 町	２階建ての家に合計 30 人位、毎回 15 人ずつで二つに分かれてきた。
コ	女性 1909 年（1930 年嫁入）	1 町	2,3 人の下士官の宿泊と、日帰り。
サ	男性 1931 年	5-6 反	20～25 人日帰りと、週末の宿泊。
シ	男性 1925 年	8 反と小作地	日帰りと宿泊と合計 20 人位。座敷 16 畳を二つに仕切った。
ス	男性 1913 年 女性 1918 年（嫁入不明）	4 反	下宿は行っていない。

＊小林論文をもとに筆者が独自に作成した。所有田圃面積と下宿については 1939 年以前の状況を記載。

報、をまとめた。第4章におけるデータの引用に際しては、主に下宿についての記載がまとめられている「②航空隊との関わり」の項目から行い、表1の記号に基づいて調査対象者を（ア）等で略記した。

しかし、以上のデータのみでは下宿に関与する重要なアクターとしての軍人のデータが欠落してしまう。そこで軍人側については、小林論文で調査対象者となった1910年生まれの青宿在住の元海軍の男性への聞き書き記録（小林 1994: 32-3）、および阿見町に隣接する土浦市の開業医佐賀純一による土浦在住の元霞ヶ浦海軍航空隊勤務の下士官（1913年生まれ）に対する聞き書き記録（佐賀 2005:263-95）、および元霞ヶ浦海軍航空隊の整備兵が阿見町の自治体史『阿見と予科練』に寄稿した体験記（阿見町 2002: 342-3）を利用する。

また地域の歴史的状況については、阿見町の自治体史『阿見町史』（阿見町史編さん委員会 1983）、『阿見と予科練』（阿見町 2002）及び、土浦市の自治体史『土浦市史』（土浦市史編さん委員会 1975）、地元の新聞記者が執筆を担当した『土浦史』（野口 1932）に依拠した。

考察対象とする時期は、1939年以前に限定する。その理由は第一に、1939年以降は総力戦ないし戦時体制による大きな影響力が、軍隊に対する影響力に重なって本地域に押し寄せるため、本論が考察対象とする軍隊の影響力を弁別して考察することが難しくなるからである。具体的には旧阿見村には1939年から新たに土浦海軍航空隊という少年航空兵養成機関や海軍航空廠という工場が設置され、勤労動員や空襲などを経験していくことになる。下宿における軍人との関係性についても、広範囲の農地買収による農家の下宿料収入への依存や、少年航空兵向けの倶楽部（軍が指定した民家に日帰りで滞在するもの）の急増によりかなり様相を変えるため、軍隊と地域の関係性に関して1939年以前と同様の図式による説明が必ずしも妥当しなくなると推定される。

なお、聞き書きで語られる内容には厳密にはいつの時期の出来事かわからないものも含まれるという限界がある。この点に対しては、語り手の生年（女性の場合はさらに嫁入りにより阿見に移住した年）及び話の内容（例えば航空少年兵向けの倶楽部について語っている部分は1939年以降のものである、など）から判断を行うことによって対処した[8]。

4　分析

本章では、第3章で紹介したデータをもとに、下宿という場においていかなる対面的相互行為が展開され、軍人と地域住民との間にいかなる関係が形成されていったのかについて分析する。その準備として、4－1において主に軍人の視点からみた下宿、4－2において下宿経営者からみた下宿について確認する。4－3・4－4において、下宿という場からいかなる関係性が生成されていったかについて論じる。

4－1　軍人の視点から見た下宿

航空隊という軍隊の構成員は、一般社会から隔離された兵営内で寝起きし厳しい訓練に従事する生活を送る。兵営という全制的施設[9]（Goffman 1961=1984）において命令・規律や厳格な時間によって管理された生活を送る軍人にとって、外出・外泊は、束の間の自由な休息を手にする時間であった。霞ヶ浦海軍航空隊の整備兵は、以下のように阿見の下宿を戦後に回想している[10]。

外出は厳しい勤務からの一時的解放であり、兵隊という身分ではあるが、世の中の空気に触れる事の出来る唯一の機会でもあり、何よりも楽しい一時であった。兵隊は殆ど外出先に下宿を取り、そこでの休憩もまた何よりの安息所であった。…… 奥の座敷に寝転んでだべり、何か食べつつの休息は、本当に心休まる一時だった。（阿見町 2002: 343）

このように航空隊の軍人にとって、下宿とは、全制的施設における管理から「一時的解放」され、寝るにせよ食べるにせよ自由に行うことのできる空間であった。たとえば、下宿の魅力として「ちゃんと畳の上で寝ることができ」（1910年生まれ元海軍男性）（小林 1994: 32）るということが語られるが、その背景には海軍航空隊において艦船に倣いハンモックで就寝するという過剰に不自由な生活が行われていたからである。

ただし、兵営からの脱出は、一方で休息を求めるが、他方では自由を得ることを通した粗暴さへとつながることも推測される。しかし本研究が用いる資料の範囲内では、下宿で軍人が粗暴にふるまった事例は見られない[11]。軍人は粗暴ではないという前提を置かない限り、下宿では粗暴さが顕在化しないとすれば、粗暴な軍人はどこにいるのか、軍人はどこで粗暴にふるまうのかという疑問が生じる。

その背景として本論が重視するのは、軍人たちには粗暴なふるまいの受け皿として、盛り場という場があったということである。航空隊の開設からほどなく阿見村には新町と呼ばれる商店街・歓楽街が形成された（阿見町史編さん委員会 1983: 528）。また乗合自動車・電車・バスなどの交通網の整備を背景にして茨城県南部最大の都市土浦へのアクセスも容易になった[12]。

特に土浦においては、霞ヶ浦海軍航空隊開設後、軍隊の利益にあずかる商店による軍人優遇を背景にして「水兵[13]連が大いに発展し、兎角粗暴の振る舞いが多」かった（野口 1932: 168）。そのなかで 1924 年には、水兵による婦女暴行事件に対し、警察が犯人を特定し航空隊に身柄の引き渡しを要求したところ、霞ヶ浦海軍航空隊は「料理店が犯人たる水兵を庇護せぬのは不誠意極まる」という口実で水兵の外出禁止の措置をとり、料理店側の謝罪と値下げによる賠償を得た（野口 1932: 168）。つまり、航空隊は、料理店が航空隊の軍人の膨大な需要に依存していることを利用して、料理店に水兵の保護という義務を課し、警察ではなく軍に協力するように仕向けた。これによって警察権力が繁華街から後退したことを背景に「水兵連は上陸の際は言語に絶した乱暴狼藉を働」くようになった（野口 1932: 179）。

軍人の視点からみれば、土浦の繁華街という粗暴なふるまいが許容される空間がある以上、わざわざ下宿を粗暴さのはけ口にする必要はなかったといえる。軍人にとっては、兵営の厳しい管理と抑圧に対して手に入れた自由を、休息のために利用する場としての盛り場と、発散のために利用する場としての下宿が分かれたかたちで与えられていた。以上を、下宿において地域住民との対立的ではない関係形成がなされる背景として確認しておきたい。

4－2　下宿経営者の視点から見た下宿

それでは軍人を受け入れる側の経営者家族にとって下宿とはどのような営みだったのだろうか。

農家にとって下宿は、本業の農業（水稲を主とする）とは別に、定期的な現金収入を得る手段であった。もちろん下宿以外にも、当時の農

民生活において野菜、麦、刈萱、蚕など副業収入を得る手段は様々に存在した（阿見町 2002: 13）。しかし重要なのは、下宿は農業ではなく、サービス業によって収入を得る経験であったことである。

それは、農業よりも楽に、農業以上の豊かさを手に入れるものとして感じられていた。

> うちのおふくろなんかが注文とって、何百人といた。カネになったからな。百姓よりよかったのは事実。よろこんで兵隊さんの下宿置いた（ケ）（小林 1994: 142）

この家は 5 町の田の他に、畑と山林を所有していた裕福な農家だが、農作業をせずとも定期的に現金収入が入る下宿業は、生活に余裕のある農家にとっても魅力的であった。まして自小作の零細農民にとっては、「結構お金には困んないで、下宿は潤いあった。毎月きちんきちんと入るから」（シ）（小林 1994: 148）という大きな生計手段であった。

このような背景のもとに多くの農家が下宿業を行っているという状況において、下宿は一定の質のサービス提供を保障する機制が働く場でもあった。下宿の利用者であった元軍人は、下宿において軍人待遇が悪くならない理由を次のように語る。

> 兵隊を置いて小遣い取りをしようとした地付きの家は広範囲におり、待遇が悪かったりすると隊内でクチコミで「この下宿はろくなものを食わせない」ということがすぐ末端に伝わってしまい兵隊がいなくなるので、ひどい扱いもなく地付きの家の方と借りる方の間はわりあいと円滑にいった（1910 年生まれ元海軍男性）（小林 1994: 33）

この元海軍軍人による説明にはさらに踏み込んだ解釈が可能である。下宿を利用した軍人が隊内に帰ったあとに否定的な口コミを流すかどうかは、下宿供給者には可能性として予期されるものの実際に確認はできないため、下宿者を失うリスクを避けるためには下宿利用者に対しておろそかな待遇はできない。このような背景のもとで、下宿経営者側も軍人に対して相応の質サービスを供給する事業者となったと推定される。

このような経済的な利害関係に加え、地域住民にとって軍人が身近な存在であったことも軍人への厚遇を考えるうえで重要である。特に霞ヶ浦海軍航空隊においては、毎年の海軍記念日に飛行場の開放が行われ、地域住民が隊内で飛行機などの見学を行い、海軍軍人が行う演芸会や仮装行列を見物するという年中行事もあった（阿見町 2002: 41）。さらに、軍人の主な供給母胎は農村であり、「農家生まれでも農家のことは何もできなくてナワナイ教えてもらった時、ヘイソの人が 4 人も並んで私とオジチャンやってるのを見てる[14]」（ア）という語りに垣間見えるように、軍人と下宿経営者は農民としての共通項を持っていた。

以上のような経済的・文化的背景のもとに、地域住民は一定の積極性をもって下宿という事業を展開していたといえる。

4－3　契約関係に収まらない交際関係の形成

以上を踏まえて、下宿では軍人と地域住民の間でいかなる対面的な相互行為が展開され、いかなる関係性が結ばれていったのだろうか。

その前提として下宿という場の特徴について触れておきたい。生活者としての軍人が反復的に訪れる場は、商店、駅、郵便局など様々であ

る。そのなかで下宿は次の特徴をもつ点で、他の機関における従業員と来客者の関係性のあり方と異なる。

下宿は家族の私生活の場を軍人という外部者と共有する点において、商店等と異なる。そこでは、軍人は靴を脱いで家に上がり、一つ屋根の下に寝食を共にする。これは、もとから客人のためにある空間（店舗）に軍人が立ち入る経験とは質的に区別可能な、空間の共有のあり方である。サービス業という生業活動を通して、私的な空間（の一部）が、開放的・公共的な空間に転換されるのである。

そして、このような場においては、利用者は匿名で利用する余地がなく、利用者とサービス供給者は、契約当初から顕名的な関係性を取り結ぶことになる。すなわち互いに名前と素性を交換し、一人の個別の人間として対面的な相互行為を開始することになるのである。

以上のように私的空間で顕名的な関係性が継続的に取り結ばれた状況のもとで、４－２でみた背景のもとに下宿経営者側は十分なサービスを供給していた。この厚遇を、軍人の側は「とても優しくねぎらってくれる」「お世話になった」（阿見町 2002: 343）とありがたく受け取っていた。4－1でみたように兵営で厳しい管理のもとに日常的に置かれている軍人にとって、この待遇の主観的価値は大きいものであったといえよう。

そして待遇に対応して、軍人の側も、ただ座敷で休息するばかりではなく、下宿の家族に対して働きかけを行う。その初歩的なものは、下宿の家の子供たちが「かわいがってもらったり」（ウ）「兵隊さんと一緒に遊んだり」（オ）、という経験で語られるような子供の世話である。これが進展すると、兵士たちが「桜の花盛りに花見に行かないと、オジチャン、長女を連れて花見に連れてってくれた。土浦まで歩きで。」（ア）（小林 1994: 128）という既婚女性の語りに見られるように、下宿経営者家族の余暇の過ごし方をサポートすることも起こる。その延長上には、軍人の実家からの名産品や野菜などの贈答（ア）、軍人の転勤後の年賀状の交換（ア）（ウ）、さらにはかつての下宿先への戦後における再訪問（ウ）なども行われていった。このような関係性のなかで、下宿経営者家族にとっても下宿で軍人の面倒を見たことは、「とても楽しかったよ」（ア）、「兵隊さんあの頃だから親しみがあった」（ウ）という経験となった。

このように軍人と地域住民は、下宿という場において、単純に家主と借り手の契約関係において求められる役割におさまらない、親密な交際関係を取り結んでいった。すなわち、一方で軍人はサービスを享受するだけではなく、代金の支払いにとどまらない返礼に相当する対応を行い、他方で下宿経営者家族も、収入を得る顧客として以上の、親切を施した個別の人間としてつきあいを形成していった。地域住民にとって下宿は、例えば航空隊に対する野菜の納入（阿見町 2002: 75）による貨幣収入の取得のように、単に軍人が金を落とすということ以上の意味をもつ経験であった。

４－４　農家の娘の結婚を通した縁戚関係の形成

以上のような交際関係形成の延長上に、農家の娘の軍人への嫁入りという現象が生じた。

サービス業としての下宿において、応接者としての役割を主に遂行するのは女性であった。農家の女性にとって、軍人に対して応接する時間は、家族経営の農業における労働力の提供者

の役割からの解放されるひとときであった。

おもしろかった。兵隊あがんないうちに、女の人エプロンかけてお化粧しておしゃれしてきれいにして、食事の準備した。嫁に行ってずいぶん片づいた人がいる。土曜日曜男はノラ、女の人らが兵隊のトリモチ、おもしろかった。実家にいる頃、習い物してたけど、こっちへ来てから兵隊さんの相手初めて（した）。最初はキマリワルクテ、なれるにつれて、名前覚えちゃうと兵隊さんと話しながら楽しかった。ハズカシ半分。（ア）（小林 1994: 128）

自らは化粧をして軍人と交流することが許される女性にとって、それは端的に「楽しい」経験でもあった。この証言者は既婚女性[15]だが、未婚女性の場合に、このような経験は、若い男性としての軍人との結婚という選択肢を浮上させるものであった。

農家の娘は兵隊さんにあこがれた。兵隊さんと一緒にやれば百姓なんてやんねえできれいに楽しくできたっていうので。男と女だから好きになって行っちゃったテイもあるし、10 人位いる。土曜、日曜になるとどこの家でも兵隊あがってごろごろしてる。（コ）（小林 1994: 144）

良い娘はほとんど海軍に持ってかれた。ずいぶんいた、20 人くらいいる。下宿してて、外泊で泊まれる人が自然に良くなって、古い兵隊など有力な人に頼んでナコウド見つけてもらった。きれいな若い人は自然と海軍にあこがれた。百姓と違って憧れの的だった。（ス）（小林 1994: 150-1）

この部落でも兵隊の嫁に行った人 4,5 人はいた。…… 百姓やってた人らによると本当に楽。朝から晩まではだしでノラ歩くよりも良かったのだろう。（エ）（小林 1994: 134）

いずれにおいても、「百姓」の生活との対比から、軍人への嫁入りが語られていることに注目すべきである。軍人は、農業のように肉体労働ではなく、給与によって生計を成り立たせる俸給生活者であった。軍人との結婚は、女性にとって、肉体労働力としての農家の嫁ではなく、サラリーマンの主婦として生きるという人生のオルタナティヴな可能性を開くものであった[16]。

そして、少なくとも相手が豊富な給与をもつ下士官などの場合には、娘本人だけではなく親にとっても海軍軍人と娘を結婚させることは喜ばしいことであった。次に引用する霞ヶ浦海軍航空隊勤務の下士官（1913 年生まれ）の証言には、裕福な海軍軍人と縁戚になることを下宿の親が望んでいることが端的に表れている。

下士官は兵舎の外に下宿することも出来たんだが、その下宿の親たちは娘と結婚させたがった。甚だしい場合には、娘を夜這いに行かせるなんてこともあった。…… なんで親が俺を気に入ったかというと、海軍というだけではなくて、私の親元から米俵を下宿にどんどん送って来るから、これは財産家だと思われたらしい。いろいろとお世辞を言う。娘をもらって欲しいというようなことを言う。（佐賀 2005: 269）

戦争における軍人の死が予期されていない時期であることは注意すべきだが、下宿の家庭の

娘に対しては、軍人と結婚するように周囲も期待をもっていた[17]。

証言からははっきりとした人数はわからないものの、1933 年に農家戸数 43 軒（小林 1994: 28）の規模の青宿部落で、4,5 人（エ）（小林 1994: 134）～ 20 人（ス）（小林 1994: 151）程度という数の軍人への嫁入りが起きた。これらの家は軍人と縁戚関係になっていたことになる[18]。

5　結論

第 4 章では、下宿という場における軍人と下宿を経営する家族との相互行為のなかで、契約関係を超えた親密な交際関係が形成され、さらに農家の娘の軍人への嫁入りを通して縁戚関係の形成もなされたことをデータから明らかにしてきた。ここから、下宿は、軍隊の構成員としての軍人と地域住民との間に交際関係や縁戚関係を取り結ばせることを通して、軍隊と地域を（経済関係にとどまらず）社会的に結びつけていく媒介として作用していた、ということができるだろう。

この観点から下宿は、軍隊と地域を結びつける結節点[19]として捉えることができる。軍隊の社会に対する影響は、この結節点における相互行為の過程を通して特定のかたちで生み出されたのである。結節点から生み出されたものは、この事例においては交際関係と縁戚関係の形成として分析されたが、他の事例においては場の特徴や相互行為過程の展開に応じて結びつきのあり方は別様でありうる。本事例においても戦中・戦後においては結節点の果たす作用に変化がみられるだろう。また、下宿以外の場が重要な結節点として浮上する可能性もある。本論はそうした探求のための足がかりとして位置づけられる。

以上の知見を踏まえて本研究の意義は 2 点にまとめられる。第一に、軍隊が社会に与える影響に関して、マクロな社会構造の変動からだけではなく、下宿という特定の場における相互行為過程に着目するアプローチを通して、関係形成という観点から動因となる要素の作用について解明した点である。第二に、豊富な蓄積をもつ歴史学の「軍隊と地域」研究においても光が当てられてこなかった軍人向け下宿という対象について分析を行い、下宿が、軍人と地域住民の関係形成を通して軍隊と地域を結びつけていく結節点であるという視点から社会学的な研究展開の可能性を示したことである。

とはいえ、本論は何点かの重大な限界を有する。第一に、本論は下宿が軍隊と地域の結節点として果たしていた作用を解明したものの、その作用を介した地域の生活の変容については、資料の制約もあって十分に論じることができていない。第二に、軍人と地域住民の関係性の分析には、下宿を経営していた農民が埋め込まれていた状況として、イエやムラ等から成る村落社会を論じる必要があるが、本論ではほとんど考察できていない。第三に、本論が用いた下宿に関するデータは、下宿の研究を目的としていない他の調査者による戦後の聞き書き資料に依拠したものである点で、第 3 章で述べたように多くの制約がある。

最後に今後の課題を述べるならば、本論で論じた 1939 年以前の下宿における軍人と地域住民の関係性が、戦時期にいかなる変容をこうむり、組織としての軍隊が消滅した戦後においてどのように継続・断絶していったのかという、戦争を挟んだ変遷の過程の解明が挙げられる。結節点としての下宿からは、そこで展開される相互行為の過程に応じて、交際関係と縁戚関係

として本論で分析した関係のあり方にとどまらない様々な関係性が産出されるであろう。また、戦後においては元軍人と地域住民の相互行為がなされる、下宿とは別の結節点も現れるだろう。軍隊がもたらしたものへの対応の連鎖の過程は戦後にも続いていくのであり、その解明によって社会に対する軍隊の長期的影響に迫ることができる。

【謝辞】
修士論文「むらと海軍」の聞き書きデータの二次利用を快く許可して下さり、さらにインタビューにもご協力いただいた小林将人様に、厚く御礼申し上げます。本論は小林様の綿密な調査なしには成り立ちえないものでした。また、論文を紹介して下さった予科練平和記念館歴史調査委員の井元潔様に御礼申し上げます。

注

[1] 例えば近代的な社会生活の秩序や生活様式の形成に軍隊が果たした役割といったテーマは歴史学が主に引き受けてきた（吉田 2002）。

[2] 海軍の階級制度においては、最下級の四等兵から一等兵までが「兵」であり、さらに昇進すると「下士官」（兵曹とも呼ばれる）になった（太平洋戦争研究会 2002: 295）。後述する小林将人の調査によると、下級軍人、例えば三等兵は日曜日のみ泊まりなしで昼食のみであり、二等兵に昇進すると 4 日に一晩になり、一等兵を経てさらに下士官に昇進すると 2 日に一晩であった（小林 1994: 32）。すなわち、階級が高くなればなるほど、下宿に滞在できる時間が長くなった。

[3] 聞き書き資料の利用に関しては、小林将人氏本人から承認を得ている。

[4] この点については、2016 年 2 月 13 日に行われた小林将人氏へのインタビューにおいて補足説明を受けた。フィールドノーツからカード化への編集作業において、データの取捨選択は行っていないため、調査者が得た全てのデータが資料編に記載されていることになる。

[5] ただし武田は二次分析の対象となるデータを、「質的データの保存・公開・2 次利用が許可されている公的機関」のデータアーカイヴに限定して解説しており、「私的に所蔵されている質的データを利用させてもらう」ルートについては論の外においている（武田 2009: 206）。

[6] 小林論文には戦前青宿各戸表（昭和 7 年の「御神輿新調記録簿と聞き書きから作成」が掲載されており（小林 1994: 46-7）、そこに記された人々に対して聞き書きが行われたが、地元の予科練平和記念館歴史調査委員井元潔氏によると、各戸表に記載された人物で現在存命中の者はほとんどいないという（2014 年 9 月 24 日インタビュー）。

[7] 5 ケースの生業はそれぞれ、土産物店、事務員、下駄屋、機織り職人、畳屋であり、機織り職人が下宿に全く言及していない以外は、下宿を行っていなかったと明言している（小林 1994: 153-61）。なお、１－２で引用した「農商にかかわらず」（丸山 1979: 8）という証言や、都市部の土浦市内各所に下宿があった（土浦市史編さん委員会 1975: 878）ことなどから、非農家が経営する下宿も存在したと推定されるが、資料の制約から本論の考察対象は農家に限定している。

[8] 1939 年以前といっても、本論が扱う小林論文その他のデータにおいては語り手の年齢層を考慮すると霞ヶ浦海軍航空隊が立地した当初の 1920 年代前半について語っていると推定されるものは存在しない。人々の対応に焦点を当てるという本論の問題関心からすると、下宿という営みがすでに地域の各家でみられるようになってからの時期が考察対象となっている点に留意すべきである。

[9] 全制的施設とは、「多数の類似の境遇にある個々

人が、一緒に、相当期間にわたって包括社会から遮断されて、閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所」（Goffman 1961=1984: Ⅴ）とゴフマンが定義しているように、就寝等の休息まで含めて収容者の生活全体が管理下におかれる施設である。もちろん兵営がその一つとして挙げられている（Goffman 1961=1984: 5）。

[10] ただしこの回想は 1941 年頃の様子についてのものである。第 3 章で述べた戦時期を除くという方針の例外となってしまうが、ここで語られている内容について、勤務内容の厳しさの程度が増しているなどの変化は想定されるものの、戦時期とそれ以前で質的に大きな差異があるとは考えにくいため、ここで採用した。

[11] もちろん回想のなかで語られなかったという可能性もある。しかし、戦時中の軍による土地買収や憲兵の高圧的な態度については率直な批判の言葉も語られていることを考えると、下宿における軍人の粗暴なふるまいについてのみ語らなかった理由が見当たらない限り、語りはある程度現実を反映したものと受け取ってよいと判断する。

[12] なお霞ヶ浦航空隊から土浦市街までは 5 ｋｍ～10 ｋｍほどの距離であり、徒歩で行くことも可能であった。

[13]「水兵」はここでは海軍兵一般を指す言葉として使われている。

[14]「ナワナイ」は縄綯い、「ヘイソ」は海軍の下士官を指す言葉としての「兵曹」のことを指す。

[15] 小林論文資料編において話者は夫と連名で記載されているが、話の内容から引用部は妻による発言と判断した。

[16] 俸給生活者の男性との結婚を通した農家の嫁から主婦への移行に関しては落合恵美子（1997: 21-5）の説明を参照している。

[17] 一方で、農家の娘が軍人と結婚していくことは、農家の若い男性にとっては不満の種になった。「こっちの若い人にはいくらか不満な気持ちもあるでしょ。あの野郎連れてったなんて。」（ス）（小林 1994: 151）、と同様の語りは（ケ）にも見られる。このような背景のもとで、新町などへ「若い衆は兵隊と喧嘩しに行った」（小林 1994: 151）という。しかし重要なのは、若者たちが喧嘩をする場所が盛り場だったことである。家族や村落が下宿で受益し、軍人と親密な交際関係を築いている以上、彼らには軍人とのコンフリクトを共同体の外側の場所で引き起こす必要があったのではないだろうか。

[18] ただし、これは軍人が地域の定住者になったことを意味しない。海軍の軍人は転勤も多く、嫁入りした娘は夫と共に転居していく者も多かったため、阿見に定住化したとは限らない。むしろ阿見に定住するようになるのは戦後である（小林 1994: 35）。

[19] 本論における結節点は、通常は隔てられている相異なる二つの社会に属する人びとが出入りすることによって両者の対面的な相互行為が集中的に生起する場を指す。その場において形成される二つの社会の構成員間の関係性の分析を通して、二つの社会の結びつきのあり方を捉えるために用いる概念である。

文献

阿見町，2002，『阿見と予科練 ―― そして人々のものがたり』阿見町.

阿見町史編さん委員会，1983，『阿見町史』阿見町.

荒川章二，2001，『軍隊と地域』青木書店.

Blumer, Herbert, 1990, *Industrialization as an Agent of Social Change: A Critical Analysis*, New York: Aldine de Gruyter.（＝

1995，片桐雅隆訳『産業化論再考 —— シンボリック相互作用論の視点から』勁草書房.）

Giddens, Anthony, 1985, *Nation-State and Violence*, Cambridge: Polity Press.（＝ 1999，松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房.）

Goffman, Erving, 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, New York: Doubleday & Company, Inc.（=1984，石黒毅訳『アサイラム』誠信書房.）

今井信雄・前田至剛，2010，「軍都の空間から地方都市の形成へ —— 三重県と群馬県の事例より」『関西学院大学先端社会研究所紀要』2: 27-41.

小林将人，1994，「むらと海軍 —— 茨城県・稲敷郡一村落の『近代化』」筑波大学大学院地域研究研究科 1993 年度修士学位論文.

丸山恒子，1979，「山河語らず —— 霞ヶ浦土浦航空隊の今昔」阿見文化会編『阿見文化』15: 5-10.

松下孝昭，2013，『軍隊を誘致せよ —— 陸海軍と都市形成』吉川弘文館.

森久聡，2013，「環境社会学における労働災害研究の現代的意義と可能性 —— 三池炭じん爆発ＣＯ中毒事故の飯島伸子調査データの二次分析から」『環境社会学研究』19: 80-95.

中野良，2004，「『軍隊と地域』研究の成果と展望 —— 軍事演習を題材に」『戦争責任研究』45: 40-7.

野上元，2012，「戦争社会学とは何か」野上元・福間良明編『戦争社会学ブックガイド』創元社，9-16.

野口佐久，1932，『土浦史　附霞ヶ浦海軍航空隊史』いはらき印刷部.

落合恵美子，1997，『21 世紀家族へ（新版）』有斐閣.

荻野昌弘，2012，『開発空間の暴力 —— いじめ自殺を生む風景』新曜社.

————，2013，「『戦争が生みだす社会』研究の課題」荻野昌弘編『叢書戦争が生みだす社会　戦後社会の変動と記憶』新曜社，1-29.

佐賀純一，2005，『戦争の話を聞かせてくれませんか』新潮社.

佐藤健二，1995，「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂，13-41.

太平洋戦争研究会，2002，『日本海軍がよくわかる事典 —— その組織、昨日から兵器、生活まで』ＰＨＰ研究所.

武田尚子，2009，『質的調査データの２次分析 —— イギリスの格差拡大プロセスの分析視角』ハーベスト社.

土浦市史編さん委員会，1975，『土浦市史』土浦市役所.

吉田裕，2002，『日本の軍隊 —— 兵士たちの近代史』岩波書店.

（しみず　りょう、東京大学大学院人文社会系研究科、soroban88carp@gmail.com）

（査読者　中筋直哉　武岡暢）

Renting Rooms as Nodes between the Military and the Civilians:

Focusing on the Interaction between the Military Personnel and the Residents

Ryo SHIMIZU

In this paper, I studied renting rooms for military personnel in the rural area where the base of naval air force was stationed before 1945, in order to reveal what kind of relationships were generated through the interaction between the military personnel and the residents. Through the secondary analysis of interview records, I found that military personnel and residents had the close personal relationships beyond contracts, and then in some cases they became relatives through the marriages between the sailors and the farmer's daughters who tried to escape from manual labor in the farm. From this point of view, renting rooms were working as nodes between the military and the civilians.